

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 17 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24401015

研究課題名(和文)多民族国家マレーシアの外国人労働者に関する学際的総合的研究

研究課題名(英文)An Interdisciplinary and Comprehensive Study on Foreign Migrant Workers in Malaysia of a Multi-ethnic Country

研究代表者

藤巻 正己(FUJIMAKI, MASAMI)

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：60131603

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は人文地理学、文化人類学、社会学による学際的研究である。本研究では、半島マレーシアおよびサラワクの都市部、農山村部各地におけるフィールド調査を通して、インドネシア、バングラデシュ、タイ、ネパールなどからの出稼ぎ労働者が、どのように多民族国家マレーシアの経済社会に組み込まれているのかが解明された。また、外国人労働者が同国の最下層や周辺的社会的集団を構成する極貧層、オランアスリおよびイバン人などの先住民、「ポルトガル人」などのエスニックマイノリティとどのように「切り結ばれた関係」を生成しているのかについても、その一端が明らかにされた。

研究成果の概要(英文)：This research project took an interdisciplinary approach involving the spheres of human geography, anthropology and sociology. Based on research in diverse fields in rural and urban areas ranging from Peninsular Malaysia and Sarawak, we investigated how foreign migrant workers from Indonesia, Bangladesh, Thailand, Nepal and so on, have been embodied into the socioeconomic system of Malaysia as a multi-ethnic country. This research also was concerned with the relationships such as alienation as well as conflict or cooperation between foreign migrant workers and the underclass or the marginalized people of Malaysia (indigenous peoples such as Orang Asli and Iban, and ethnic minority groups such as Portuguese).

研究分野：人文地理学

キーワード：外国人労働者 マレーシア 人文地理学 文化人類学 社会学

1. 研究開始当初の背景

1980年代以降、経済のグローバル化にともない国際労働力移動が拡大し、移民労働力や外国人出稼ぎ労働者（以下、外国人労働者）をめぐる問題が世界各地で顕在化するようになった。こうした動向をふまえ、Saskia Sassen (1988) などの研究によって、米国など先進工業国において、移民労働力や外国人労働者が新たなエスニックマイノリティあるいは最下層として定位されることが明らかにされてきた。しかし、外国人労働者の受入れは、先進工業国や途上国の中でも中東およびシンガポールなどの上位所得国だけの現象ではない。慢性的な労働力不足と急速な経済成長とがあいまって、注意所得国から上位所得国に移行しつつあるマレーシアにおいても同様に、過去約 20 年間に、工場・建設・農園・家事・サービス部門の従事者としてインドネシア、バングラデシュ、ネパール、タイなどからの、推定で 300 万人規模の外国人労働者受入れ国となっている。

そこで本研究では、(1) ニューカマーとしてのアジア系外国人労働者が、多民族国家マレーシアにおいてどのような経済社会 - 空間的状况におかれているのか、また、(2) 「繁栄のなかの貧困」(Jamilah Ariffin ed. 1993) 状況を依然として引きずっているローカルの先住民族やエスニックマイノリティを含む極貧層などと、外国人労働者がどのような関係性を生成しているのかといった側面についても関心を払う。外国人労働者は、ローカルな最下層とともに、現代マレーシアにおける「アンダークラス」を構成しているものと措定されるからである(図1)。

2. 研究の目的

本研究が対象とするマレーシアは、1980年代以降半ば以降、急速な経済成長を経験し、労働力不足を補うため、農業・工場・建設・家事労働分野を中心に、そして 90 年代後半

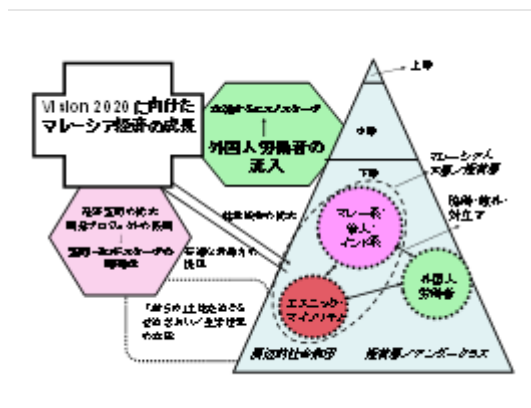


図1 研究枠組み概念図

以降は、サービス部門においても外国人労働者を受け入れてきた。本研究の目的は、非合法滞在・就労者を含めると約 300 万人と推定されるインドネシア、フィリピン、バングラデシュ、タイ、ネパール、ミャンマー、ベト

ナムなど周辺アジア諸国からの外国人労働者が、多民族国家マレーシアの経済社会にどのように組み込まれ、地元社会との間でどのような関係性を構築しているのかについて、学際的総合的にその実態を解明するところにある。また、同国の貧困層や周辺的社會集團(オランアスリヤイバン人などの先住民、「ポルトガル人」などのエスニックマイノリティ)との間で、外国人労働者がどのような「切り結ばれた関係」(協働・疎外・対立など)を生成しているのかについても関心を払う。

3. 研究の方法

研究代表者および分担者はいずれも、マレーシア各地で長年、フィールドワークを行ってきた。そうしたフィールド経験と調査研究蓄積を活かしつつ、本研究においては、観察とインタビューを中心に、エスノグラフィ的方法により、半島マレーシアおよびサラワクの都市部・農村部各地の、さまざまな部門における外国人労働者の就労・生活実態の解明を試みた。また、外国人労働者に関する現地新聞・雑誌・Web 記事をテキストとして、さらに地元民へのインタビューを通して、外国人労働者に対するホスト社会の言説に分析も行った。

なお、現地調査にあたっては平戸幹夫、薬師寺浩之、Tarmiji Masron に研究協力者として参加してもらい、研究代表者および分担者がカバーできない分野についての調査研究を依頼した。さらに、Universiti Sains Malaysia(マレーシア科学大学)、Universiti Utara Malaysia(マレーシア北部大学)、Universiti Malaysia Sarawak(サラワク・マレーシア大学)のカウンターパートの協力によりアンケート調査なども適宜実施した。

4. 研究成果

研究代表者の藤巻正己は、主にクアラルンプルとペナンの街頭において、<遊歩者>(フラヌール)的観察、写真撮影そしてインフォーマルインタビューを通して、市場や路上の屋台、ショッピングモールのキオスク、食堂、マッサージパラーの従業員、そして警備員として就労しているミャンマー人、バングラデシュ人、ネパール人など外国人労働者の日常生活の実態解明に取り組んだ(写真1)。また、新聞記事や Web 上のブログを通して、地元社会の外国人労働者に対する言説分析も継続的に行った。得られた知見は個々断片的ではあるが、地元民からは「チャイナタウンはもはやチャイナタウンではない!」と揶揄されるほどに、過去 10 年間に、主要都市部のサービス業部門(ツーリズムも含む)の就労者の多くが、「勤勉」で「忍耐強い」外国人低賃金労働者によって支えられていることが明らかとなった。



写真1 クアラルンプルのチャイナタウンの両替・送金商に集まる外国人労働者たち

それらの知見をもとに、外国人労働者をめぐる〈エスノスケープ〉(アルジュン・アパデュライ 2004) 論的観点から、彼らのエスノグラフィを現在、執筆中である。また、現地協力者の Tarmiji Masron (マレーシア科学大学) との共同により、カメルーンハイランドの農園と先住民のオランアスリ社会との関係性について調査を行ったが、当初期待されたオランアスリの拡大する農園での就労実態はほとんどなく、もっぱら「勤勉」で「忍耐強い」バングラデシュ人、ネパール人、ベトナム人などの外国人労働者によって農園労働が担われていることや、就労・生活が農園内で完結している外国人労働者と地元民、とくにオランアスリとの間には「切り結ばれた関係」が成り立っていないことが明らかにされた。

研究分担者の山本勇次はこれまでのネパール研究をふまえて、主にベナンの工場やレストランチェーン店で就労しているネパール人労働者を対象にインテンシブなインタビュー調査とアンケート調査を行い、量的・質的分析を行った。また、受入れ側のベナンの人材派遣会社のみならず、彼らを送り出している本国において、人材斡旋仲介ブローカー(マレーシアでの出稼ぎ労働経験者)への聞き取り調査を遂行したことによって、ネパールとマレーシア間の出稼ぎ労働者派遣ネットワークの実態が明らかにされようとしている。

マレー半島東海岸のパハン州ブカン地区のマレー人漁村(スクク村)において長年にわたり定点的研究を行ってきた田和正孝は、同村に定着するようになったカンボジア難民の就労・生活を明らかにするために、カンボジア人に対するインタビュー調査やライフヒストリーの収集を遂行した。また、田和とはすでに信頼関係を構築しているホスト側のマレー人漁民のカンボジア人に対する眼差しや態度、カンボジア人からみたホスト社会に対する評価から、両者の間には一定の生活距離がありながらも、漁労での協働関係が構築されていることが明らかとなった。

祖田亮次は、サラワク州ピントゥル川内陸部流域のイバン人社会が小農アブラヤシ栽培地域に変容していく過程とそれにともなう問題(元焼畑民・元狩猟民の生業変化など)について長年、関心を払ってきた。本研究では、アブラヤシの大規模なプランテーション開発が拡大するにつれて、過去10年間にインドネシア人労働者が急増したが、イバン人社会がプランテーションから逃亡、離脱したインドネシア人の駆け込み地、就労先となっていることを明らかにした。そして、次第にインドネシア人労働者がイバン人との共住や婚姻を通して、非合法労働者の現地化・在地化が進んでいることを実証し、それにともないサラワク内陸地域のエスニック構成の変化が同時進行していることも予見するに至った。

石井香世子が研究対象としたタイ・マレーシア国境付近で就労するタイの少数民族労働者は、現地調査により主に3つのグループが調査対象として把握された。第1グループはゴムのプランテーションで働く北タイ・東北タイ出身者であり、その多くがプランテーション内の仮設住宅に居住している。第2グループは北タイ出身の少数民族であり、マッサージなどのサービス業部門で就労している女性労働者たちである。彼らは、かつて旧国民党軍兵士が定住した山村に生まれ育ったため、「中国語」を話すことができる。そうした「中国人性」を資本に、華人系マレーシア人やシンガポール人を顧客としている。第3のグループは、マレーシアの諸都市で「ハラール・タイ料理」店(トムヤン・レストラン)を営むマレー・ムスリム系タイ人である。彼らは、タイ国内では周縁的集団として位置づけられているが、マレーシアでは「タイ人」としてタイ料理店を営むことによって経済的上昇を図っている。第2・第3のグループは、出身国では周縁化された人々であるが、〈越境労働空間〉においてエスニシティを自在に使い分け/演じ分けることによって、よりよい暮らしを求めた戦略を実践していることが明らかになった。

研究協力者の平戸幹夫は、マレー半島中央部のパハン州における FELDA (連邦土地開発公社) プランテーション開発地域のジュンカ地区で就労するインドネシアおよびバングラデシュからの労働者の就労・生活実態について、マレーシア北部大学のカウンターパートとともに数年にわたり、調査研究を進めてきた。FELDA プランテーション開発は本来、ブミプトラ政策の一環としてマレー農民の育成を企図したものであったが、ジェンカ地区では1980年代以降、若年層の都会への流出によって不足する労働力を外国人労働者によって補わざるを得なくなっていた。加えて、近年は副業としてのホームステイプログラムをともなうアグロツーリズムに参入するようになり、これまで以上に外国人労働者に依存する状況が強まりつつある。平戸は、

ジェンカ 13 という FELDA 村において、定点的で精緻な聞き取り調査と多項目にわたるアンケート調査を通して、ロンボク島出身のインドネシア人とバングラデシュ人の労働者の就労・生活実態や彼らの関係性について量的質的分析を行った。そして、雇い主のマレー人は副業に、外国人労働者がアブラヤシ・プランテーションにかかわるといふ、これまで明らかにされてこなかった「共生関係」を見出すことができた。

同じく研究協力者の薬師寺浩之は、バックパッカー研究の経験をふまえて、ペナンのジョージタウン(2008年7月に世界文化遺産に登録された歴史遺産地区)や国際的なビーチリゾート地であるランカウィ島のツーリスト・エンクレーブにおいて、現地のホスピタリティ産業(ゲストハウス、カフェ、食堂、バー、クラブなど)で働くミャンマー人などの外国人労働者、雇用主、およびマレーシア人労働者に対して、参与観察をともなうインタビュー調査やアンケート調査を行った。その結果、ホスピタリティ産業における外国人労働者の雇用・就労実態が解明されるとともに、地元民の外国人労働者に対するネガティブな眼差しが認められるものの、観光地経済を支えるホスピタリティ産業が外国人労働者なしでは成立しえないことを実感しているというアンビバレントな状況を析出することができた。

2020年の先進国入りを目指して経済成長をさらに加速させようとするマレーシアにとって、外国人労働者の果たす役割はますます大きくなろうとしている。しかし、依然として外国人労働者の「過剰存在」が社会問題となっており、ゲストワーカーとして受け入れられるべき彼らに対するステロタイプ、偏見や蔑視は払拭されていない。それどころか、そうしたネガティブな眼差しは、さまざまに変異する言説をともないながら、マスメディアやインターネットを通じて拡大再生産されている。こうした社会状況を憂慮したマレーシア出身の若手社会学研究者(Parthiban Muniandy 2015)が、クアラルンプルとジョージタウン(ペナン)の外国人労働者に関するエスノグラフィーを刊行したことは、社会的にも学術的にも有意義であると言えよう。平成24~27年度に実施された本研究によって得られた知見は断片的であると言わざるを得ないが、Parthiban Muniandyの研究がクアラルンプルとペナンの都市サービス産業に従事している外国人労働者だけに焦点をあてているのに対して、本研究は都市部のみならず農山漁村部におけるさまざまなセクターで就労している多様な外国人労働者を対象としている点においてより有意義であると考えられる。Parthiban Muniandyの著作を超える論集の刊行をもって、本研究の成果とその意義を世に問うこととしたい。

<引用文献>

- Saskia Sassen, *The Mobility of Labor and Capital: A Study in International Flow*, Cambridge Univ. Press, 1988
Jamilah Ariffin ed., *Poverty amidst Plenty; Research Findings and the Gender in Malaysia*, Pelanduk Publications, 1993
アルジュン・アパデュライ(門田健一訳)、*さまよえる近代*、平凡社、2004
Parthiban Muniandy, *Politics of the Temporary: An Ethnography of Migrant Life in Urban Malaysia*, Strategic Information and Research Development Centre, 2015

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

- ISHII, Kayoko, *Minority Migrant Networks Scattered Across Thailand, Malaysia and Countries Further Away: Research Scope and Plan*, *Journal of Ritsumeikan Social Sciences and Humanities*, 査読無、6, 2013, 3-7, http://www.ritsumei.ac.jp/acd/re/k-rsc/hss/book/pdf/vol06_02.pdf
Tarmiji Masron, FUJIMAKI, Masami, Norhashimah Ismail, *Orang Asli in Peninsular Malaysia: Population, Spatial Distribution and Socio-Economic Condition*, *Journal of Ritsumeikan Social Sciences and Humanities*, 査読無、6, 2013, 75-116, http://www.ritsumei.ac.jp/acd/re/k-rsc/hss/book/pdf/vol06_07.pdf
山本 勇次、元グルカ兵探報紀行 ポカラからペナンまで、立命館大学人文科学研究紀要、査読無、102、2013、175-205、http://www.ritsumei.ac.jp/acd/re/k-rsc/hss/book/pdf/no102_07.pdf

[学会発表](計17件)

- 薬師寺 浩之、マレーシアのツーリストエンクレーブで働く外国人労働者が観光空間形成に果たす役割 ジョージタウン・ペナンロードの事例、2014年人文地理学会大会、2014年11月09日、広島大学東広島キャンパス(広島県東広島市)
ISHII, Kayoko, *Trans Migration Networks among Ethnic Minorities in the Global Era*, *The 18th World Congress of Sociology*, 2014年07月19日、横浜国際会議場(神奈川県横浜市)
薬師寺 浩之、マレーシア・ジョージタウンのバックパッカーゲストハウスにおける外国人労働者に関する研究、2013年人文地理学会大会、2013年11月10日、

大阪市立大学(大阪府大阪市)
石井 香世子、朱雀 夏子、Migration
Networks among "Chinese" Migrant
Workers from Thailand to Malaysia、第
86 回日本社会学会大会、2013 年 10 月 12
日、慶應義塾大学(東京都港区)
ISHII, Kayoko、Border Preferred
People: Ethnic Minorities Migrating
from Northern Thai Border,
International Symposium on Culture and
Society in Southeast Asia, School of
Social Sciece, 2013 年 02 月 13 日、
Universiti Malaysia Sabah,
Kotakinabalu, Malaysia
ISHII, Kayoko、Trans-border life of the
Ethnic Minority People, 日本社会学会
第 85 回大会、2012 年 11 月 03 日、札幌
学院大学(北海道札幌市)

〔図書〕(計 6 件)

藤巻 正己 他(立命館大学地理学教室
編) 文理閣、観光の地理学、2015、331
(298~325)
藤巻 正己 他(天理大学アメリカス学
会編) 天理大学出版部、アメリカスのま
なざし 再魔術化される観光、2014、
313 (37~58)
SODA, Ryoji 他(Husa, K., Trupp, A. and
Wholschagl, H. eds.), Department of
Geography and Regional of Vienna,
Vienna, Austria, Southeast Asian
Mobility Transitions: Issues and
Trends in Migration and Tourism, 2014,
445 (100~121)
祖田 亮次 他(横山 智 編) 海青社、
資源と生業の地理学、2013、350 (137~
164)
祖田 亮次 他(市川 昌弘 他編著) 昭
和堂、ボルネオの<里>の環境学 変
貌する熱帯林と先住民の知、2013、240
(1~24)
祖田 亮次 他(陳 天璽 他編著) 新
曜社、越境とアイデンティフィケーシ
ョン: 国籍・パスポート・ID カード、2012、
488 (320~338)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:

種類:
番号:
出願年月日:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤巻 正己(FUJIMAKI Masami)
立命館大学・文学部・教授
研究者番号: 6 0 1 3 1 6 0 3

(2) 研究分担者

田和 正孝(TAWA Masataka)
関西学院大学・文学部・教授
研究者番号: 3 0 2 1 7 2 1 0

祖田 亮次(SODA Ryoji)
大阪市立大学・文学研究科・准教授
研究者番号: 3 0 3 2 5 1 3 8

山本 勇次(YAMAMOTO Yuji)
大阪国際大学・現代社会学部・名誉教授
研究者番号: 5 0 1 1 4 8 0 6

石井 香世子(ISHII Kayoko)
東洋英和女学院大学・国際社会学部・准教
授
研究者番号: 5 0 3 6 7 6 7 9

江口 信清(EGUCHI Nobukiyo)
立命館大学・文学部・教授
研究者番号: 9 0 1 8 5 1 0 8
(平成 24~25 年度研究分担者。)

(3) 研究協力者

平戸 幹夫(HIRATO Mikio)

薬師寺 浩之(YAKUSHIJI Hiroyuki)

Tarmiji Masron